

エンタメ

仙頭 武則

■ 教え子が集う映画祭

日本映画の未来を憂え、後進育成のために大学教員になって十三年。私の教え子たち(門人)が作品を携え集う、「第二回仙頭武則MONJIN映画祭」が十九日から、名古屋市の大須シネマにて開催される。二〇一九年に第一回が開催されたが、それ以後はコロナ禍で開催できず、ようやく第二回開催となった。映画の製作作業は果てしない思考の連続だ。「どこまで考えれば」と問う学生には「無限」と答えるしかない。正解は無限にあり、しかし明らかでない間は存在する。映画づくりは実に厄介。それでも等身大の「私」を前面に打ち出した学生映画が多い中で「物語」を追求した作品が生まれたり、締め切り直前まで「まだ何かできるはず」と貪

未来へ 答えのない挑戦



2019年の「MONJIN映画祭」で話す筆者＝名古屋市中区の大須シネマで

欲に取り組んだりする姿勢を見る時、映画の未来にかすかな光が差す。最終の二十五日には、私が沖縄在住時に監督した『NO THING PARTS 71 REIWA』も上映する。二〇年にフランスのある映画祭で上映される予定だったが、新型コロナウイルスの拡大で幻となった。軍用地をはじめとする「本土のヒト」は知らないままさまざまな問題を扱い、公開時は賛否両論を巻き起こした。その劇映画の再々編集版だ。映画祭は規模にかかわらず

「発見」が共通のテーマ。名古屋から発信される映画の未来をいち早く目撃してほしい。

別件で、明日十六日からは、私がプロデュースした映画『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』(〇六年公開、青山真治監督)が、名古屋のセンチユリーシネマで上映される。世界にウイルスが蔓延し、感染者は自殺という方法で死に至る。唯一の抑制方法は、「あるミュージシャンが奏でる音を聴くこと」という設定。タイトルは、ヘブライ語でキリストの最期の言葉とされている「神よ、なぜにわれを見捨てたもうや?」だ。映画館の可能性を最大限広げる音響システムでお届けする。どちらの劇場にも卒業生が勤務する。教え子たちが待っていてくれる師走だ。(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー)次回掲載は一月十九日)